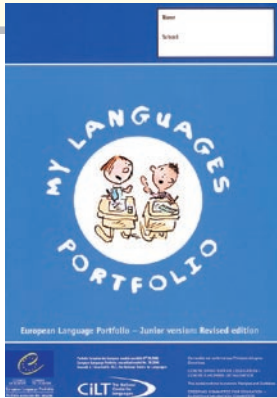


外国語を身につける 真の意義とは――

外

外国語教育研究センターではいま、「行動中心複言語学習プロジェクト」という事業に取り組んでいきます。その目的をひと言で言うならば、慶應義塾全体における一貫した外国語教育プログラムのための、共通参照フレームワークの構築です。

現在、高校までの英語教育と大学におけるそれとの間に大きな断層があることは、教育現場の共通認識です。その原因の一つとして日本には、一貫した言語教育プログラム、あるいは言語教育への確固たる理念がないという問題が挙げられます。そこで慶應義塾では、一貫教育校から積み上げる外国語教育の枠組みを築こうとしているのです。



ヨーロッパの語学教育で使われている『My Languages Portfolio』は一生涯使える言語学習記録帳。現在、この「慶應義塾版」を制作中

ありました。しかし、2001年に欧州評議会が「外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（^{セフアール}CEFR）」を提唱し、学校種にかかわらずすべての生徒が母語12言語を習得することを目標にした、言語教育の基本的な枠組みを構築しました。その結果、年齢や在籍学校という枠を超えた基準に基づき、個人の習熟度を明らかにできるようにになりました。外国語教育研究センターが推進するプロジェクトも、そうした外国語教育の統一尺度を設定することから着手しています。

複言語化の社会に向けて

外国語を学ぶ目的は、人それぞれです。ビジネスのため、という人がいるでしょう。ただ、相手国の言葉が話せても、その国の商習慣を知らなければ、商談の成立は望めません。それ以前に、自身が魅力的な人間であることが伝わらなければ、アポイントメントさえ取れないでしょう。また、国際化への対応と答える人もいるでしょう。では、その人と

外国語教育研究センター所長／
経済学部教授
境 一二三



東京外国語大学、東京大学で独語、独文学、美学を芸術学を学ぶ。現在の専門は外国語教育。2007年10月、外国語教育研究センター所長に就任。

つての「国際化」とは何でしょう。もし同じ職場にいる外国人から「毎日3回、仕事中にお祈りをしたい」と言われたとき、イスラム教の知識や信仰に対する理解度で、対応はがりりと変わるはずですよ。

みなさんは「複言語」という言葉をご存じですか。「複言語」とは、一つの社会の中で一人ひとりが程度の差こそあれ複数の言語を身につけ、かつ言語の背景にある文化を相互に理解したうえで交流し共存している状態のこと。その一方で、たとえば同じ街の中に日本語を話す人、中国語を話す人、韓国語を話す人が生活しているが、互いに交流を持たない「多言語」とは区別して用いられます。「複言語」は共生と平和の礎になります。ですが、「多言語」はときに対立のきっかけともなります。外国語を学ぶ目的とは、まさに一人の人間として「複言語」の能力を身につけることにあります。つまり、複数の言語を習得するとともに複数の文化を理解し、それらを適宜使い分けながら、言語も文化も異なる他者を尊重でき

るようになるということです。

外国語を学ぶ「入り口」

外国語を身につけるうえでいちばん大切なのは、自分の思いを伝えたいという気持ち、相手のことを知りたいという気持ちを強く持つことです。本心から伝えたい、知りたいと思えば、単語を並べるだけでも通じ合えるはず。まずはそのような「場」に身を置くことです。ある程度のコミュニケーションができてくると、「もっと複雑な内容を伝えたい」「もっと正確に知りたい」という欲求が自然に生じ、そのための文法を学び、単語を覚え、自ずと使える文章も複雑になっていきます。

なお、複数の言語において「読み・書き・聞く・話す」のすべてができるようになる必要はありません。文学が好きなら読む力を、海外旅行が趣味なら会話の技術を身につけることに力を注ぎましょう。まずは、自分にとって最も身近なものを、外国語と外国文化の入り口にしてみたいかがでしょうか。